

磯田直史著「武士の家計簿」を読んで（新潮新書）

本書は、今を時めく歴史学者の磯田直史が慶大の大学院生時代に入手した「金沢藩士猪山家文書」に基づき 2003 年に出版された江戸から幕末・明治にかけての武家の生活を経済面から捉えた歴史書で、彼の出世作となって、2010 年に監督・森田芳光、主演・堺雅人・仲間由紀恵により映画化された。

1. 猪山家について

本書の主役は、天保 13 年（1842 年）から亡くなる明治 11 年（1878 年）まで 36 年間家計簿を付け続けた猪山直之であるが、その背景には加賀藩御算用者として享保 18 年（1731 年）に前田家の直参に加わった五代目猪山市進から代々の経理マンとしての家系がある。

猪山家の歴史を概観してみると、直之の祖父から新政府の官僚となった息子の正之まで、皆 20 歳代早々に御算用者に就任し抜擢・重用され、文官としてのエリートコースを歩みそろって長命であった。特に親子で勤務しダブルで藩から収入を得ていたことが興味深い。

2. 江戸時代の物価と貨幣価値について

本書の特色は、江戸時代の家計を分かりやすく現代的に分析・解説したところにあるが、作者が苦労したのはまさしく江戸時代の物価と貨幣の「現在価値」を把握するところにあった。

日本銀行の HP でも「同じモノであっても、江戸時代と現在とでは生産方法や入手の容易さが異なるなど値段を単純に比較すると誤解を招きやすく、金貨・銀貨・銭貨からなる貨幣制度（三貨制度）などいろいろ考えなければならない」として、金 1 両の現在価値に明確な答えを出していない。

本書では目安として、米価で比較換算した場合には 1 両 5.5 万円となるが、地方の大工見習の賃金を基準に「冒険的ではあるが」との条件付きで、1 両の現代感覚を 30 万円として話を進めている。

3. 猪山家の財政再建について

親子二代で合算した年収の二倍にまで負債が膨張したのは、父信之が 46 歳の時に藩の物品購入係、52 歳で將軍家斉の娘との婚礼準備係として二度の江戸詰め勤務によるものと説明しているが、ともに余禄（袖の下）が相当多い役職と考えられるが、よほど清廉潔白に務めたものと思われる。

猪山家の負債整理の核心は、商人、親戚そして藩からの借入れ条件の緩和にあるが、先祖伝来資産の思い切った処分と、藩主・前田家からの絶大な信頼がそれを可能にしたと判断される。

4. 明治期の猪山家について

幕府瓦解の直前では、直之は江戸において藩主前田家の会計責任者を務めると同時に、息子の成之は弱冠 23 歳ながら加賀藩の兵站事務を担当し、京都において薩長との戦いに備えていた。

結局藩は朝廷側につき、成之は大村益次郎によって新政府軍務官に抜擢される。元革命家の寄り合い所帯の新政府は、成之のような会計の実務担当者を必要としていたことから、以降は官僚としての道を歩むこととなる。そして、直之は金沢に隠居して栄光の加賀藩士の没落を見届けることとなる。

成之は東京で経済官僚としてまっとうに生き抜き、教育により息子 3 人ともに官僚に育てあげたが、最後は甥がシーメンス事件に巻き込まれるなど、失意の内に逝去しているのが印象的であった。

5. まとめ

本書は猪山家の生活の記録を克明に辿ることで、近世（江戸時代）から近代（明治時代）にかけての大きな社会変革を、肖像写真をそのまま見るように再現した名著であると評価されるが、何よりもそのネタとなる猪山家文書を著者が掘り当てたことが幸運であった。

本書以降も「日本史の内幕」、「素顔の西郷隆盛」など多くの著作があるものの、どれも断片的な史料の寄せ集めの感があり、作品のスケールも小さく、私には物足りなく感じられる。

なお、本書では金一両を「冒険的に」30万円として経済状態を説明しているが、近年高騰の大工賃金から算出したもので、個人的には他の物価を考えると1両は10~15万円が適当と思っているが、物価は地域や時代によって大きく異なり、変動するので、これからの経済史としての研究が期待される。

それにしても、猪山直之とその記録を残した成之は、歴史に残る有名人ではなかったが、大きな社会変動の中でも、必要とされる技術や能力をもって、恐れずまっとうに生き抜いた大した人物であった。

平成30年9月28日

瀬川隆二（47年法）